



1993 年 (平成 5 年)
10 月号 (No. 581)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目 次

韓国・国際環境保存講演会に参加して 1
 蔡礼楽会長を囲む会…………… 2
 ジャック・エデ氏歓迎会…………… 2
 海外の山…………… 3
 東西南北
 ウェストンと市野瀬の村長…………… 4
 徳本峠を越えて…………… 4
 釈迦岳と越敷岳…………… 5
 支部だより…………… 6
 秋田支部 岐阜支部 越後支部
 報告
 台湾を訪問して…………… 8
 三水会・八月現地集会…………… 8
 日本山岳会所蔵山岳地図目録 6
 アルプス (1)…………… 9
 図書紹介…………… 10
 『山を読む』『初見一雄追悼集』
 『山の高さ』『レッドデータブック
 ・日本の絶滅危惧植物』
 自然保護随想…………… 10
 書籍・雑誌受入報告
 ……………… 12
 新入会員 住所・住居表示
 変更…………… 14
 ルーム日誌 会員異動 山
 研・ナムチャ合同募金応募
 状況…………… 15
 お知らせ…………… 15
 ▶日本山岳会事務取扱時間
 月、火、木、土曜 10時～20時
 水、金曜 13時～20時
 日曜・祭日は休み
 ▶図書室開室時間
 日曜・祭日・月曜を除く毎日
 13時～20時

お知らせテロップ電話
3234
六六五九

HAT-J が主催する
韓国・国際環境保存講演会に参加して

大森弘一郎

自然保護シンポジウム (正式には国際環境保存講演会) が九月五日に韓国・ソウルで行われた。これは HAT-J が主催した「青少年国際交流雪岳山環境体験登山」の一部として、大韓山岳聯盟が共催したもので、日本山岳会からは藤平会長と私が出席した。

雪岳山登山には参加できなかったが、この体験登山が非常によかったことは帰ってきた各国の高校生たちの動きからも感じられた。標高三〇〇メートルから一七〇八メートルまでの長い登山道は非常に美しい山域で、環境は美しく整備されていたという。日本も見習うべきだとの感想が日本の高校生の発表にあった。景色に見とれて歩くため

に転んで擦りむいた、ということ以外は事故もなく、よい登山ができたことは、韓国大学山岳聯盟の李任視会長の親身のお世話の賜という話をいくども聞いた。

私もこれに参加して、青少年を中心とした国際協力の姿を体験したかったものだと思った。

会長と私は前日にソウルに入り、日本山岳協会の斎藤会長、国見さん、田部井さん、鈴木郭之さんと行動を共にし、韓国山岳会の孫慶錫副会長、金鐘先理事に懇切なご案内をいただいた。ソウル郊外の大宛閣 (昔の村落を模した建物でできている) の昼食の席上で、欧米人と東洋人の自然感や自然保護の

考え方の違いなどが話題になった。東洋的な自然同化の考えで世界の自然保護をリードすべきだというような話で盛り上がった。

シンポジウムの冒頭での藤平会長の挨拶はそれにふさわしいもので、次のように述べられた。

「私の家からは北アルプスの連峰が見える。私はそれを見て育った。山は私の心をなごませてくれる心の故郷だ。その山が汚されるのには、自分の心が踏みじられるような気がする。環境問題に対する欧米の思想には精神文化の側面が欠けているように思い、不足を感じる。韓国・中国は同じように精神面よりの感受性が強いと思われる。

子供のころの体験が、心の基盤になることは HAT-J 大会でのメスナーの話の中にもあり、欧米人も我々東洋人と同じなのだ」と知らされる。HAT

「J」の青少年対象の活動は、このような意味でも価値のあるものと思う。昨年 HAT-J の富士清掃登山のあと立山の清掃をしたが、このあと子供たちを海に連れて行き、その夜、インドとネパールの子供たちがカーストを超えて一緒に踊っていた。

環境問題の取り組みは各国の共通認識になっており、これを進めることは、同時に国際的な文化の融和につながると思う。

今年立山を訪れる海外からのお客さんが数倍にもなると予想され、これに伴う文化摩擦が懸念される。受入れ体制の不備もあるが、これらの問題について時間をかけて、個人と個人の接触をふやしていくことが必要であると考えられる。

重廣恒夫評議員・ヒマラヤ遠征十三回、八〇〇〇メートル級四座登頂のス

ライドを使い、次のように報告した。「美しいヒマラヤを後世に残すために、take in, take outの努力をしている。しかし、限界への挑戦であるため、一〇〇パーセント持ち帰っていないのが実情。全く残さないためには、行かないのがベストということになるが、我々は未知の世界に挑戦する権利もある。しかし、その権利を使うためには最大限山を汚さない努力が必要である」

この後、参加した各国高校生たちから感想が述べられた。「参加への不安、乗り越えられた喜び、山の美しさ、自国の山も美しくしたい。指導者が率先して実行する姿への感銘、体験を通して多くのことを学んだ」など、感動の報告であった。山を通して、環境を通して、青少年に与えた国際教育の成果を得たように思う。

シンポジウムの最後に、飛び入りで私にも時間が与えられ、「四カ国語・環境と安全登山パンフレット」の説明を次のようにした。

「日本山岳会の自然保護委員会が中心になって、韓国山岳会の孫さんを始めとする多くの皆さんの協力でできた日本の山での必要にして重要なことが濃縮されて書いてある。ぜひよく読んでいただき、日本に来られたとき、これを参考にして北アルプスを十分に楽

しんでいただきたい」

藤平会長が別の機会に話しておられた「汗することの大切さ。口のみでなく、実行がともなって意味がある。田部井さんが理論家でなく、実行家であることは素晴らしい。この輪が、H A T-Jからどんどん広がっていくことを望む」ということを同じく実感した三日間の旅であった。

中華民国山岳協会 蔡礼楽会長を囲む会

去る八月十一日、中華民国山岳協会蔡会長を囲む晩餐会が当会関係者有志により有楽町のプレスクラブで開かれた。

蔡会長は帰台準備でご多用中をご出席いただき、当会からは藤平会長、村副会長、松田評議員ほか関係者数名が参加した。蔡会長の晩餐会開催に対するお礼の言葉に引き続き、藤平会長からは過日同氏訪台のみぎり、中華山協の皆様から種々ご高配を受けたお礼を述べ、併せて今後両会の友好がいつそう深まることを希望すると挨拶された。

歓談一巡後、松田評議員から中華山協のUIAA正式加盟について祝意が述べられ、また、参加者一同の略歴紹



中華民国山岳協会会長蔡礼楽氏を囲んで

介などもあって、一同和気あいあいのうちに宴は終了した。ロビーにて記念撮影後、再会を約し解散した。

なお、今を去る五十年前、旧台湾山岳会の解散に際し、同会会長平沢亀一郎氏（故人、当会名誉会員）から、日台友好の久遠を祈って当時の青年会員らに手渡されたシエンクのピッケルは、蔡会長の手元に大切に保管されている由である。

（参加者）藤平、中村、松田、大森、神崎、鈴木、河西、貫田、木村、織田、沢（美）、佐藤（知）、藤田（礼）
（木村俊博）

ニュージーランド山岳会 ジャック・エデ氏歓迎会

海外連絡委員会

昨年来、来日を希望されていたニュージーランド山岳会の重鎮ジャック・エデ氏が、去る八月十九日夕方、夫人をともなって初来日され、翌二十日夜七時から、本会ルームにてさやかな歓迎会が行われた。

今回の来日は、二十三年前にニュージーランドに遠征したおり、氏に大変お世話になったという旧国鉄山岳会隊の隊長を務められた湯川龍二氏（本会会員）、ならびに松田前副会長の働きかけにより実現した。

エデ氏は、地元カンタベリー山岳会の中心的メンバーとして半世紀以上にわたり第一線で活躍され、自ら精力的に登山活動を行うかたわら、多岐にわたる登山技術および遭難救助技術の指導、普及に努力され、近年その功績に対し、女王陛下功労勲章を授与されたともお聞きした。

当日は、松田前副会長、そして湯川氏からエデ氏の紹介を兼ねた挨拶をいただいた後、引き続きエデ氏が持参されたスライドが上映された。開拓当時のニュージーランド・アルプスの貴重な写真に加え、氏自らが初

登頂されたマイタ・ピークなど数多くの美しくかつ野生味あふれるスライドは、大変興味深く、時間がたつのを忘れさせてくれた。

その後、本会女性会員らによる手作りのささやかな宴が催され、以前現地でお世話になった旧女性懇談会の方々を中心に、なごやかな歓談の一時を過ごし、記念品の贈呈などを行った後、午後九時過ぎ散会した。

エデ氏は、現在七十六歳とご高齢にもかかわらず大変お元気で、最近膝を手術され、少し山が遠くなったと言っておられたが、碧く澄んだ精悍な目差しと物静かな語り口からは、山への衰えることのない情熱を窺い知ることができた。

なお、エデ氏夫妻はこの後、日光、京都などを観光され、帰国された。参加者 松田前副会長、湯川龍一氏他三十三名。

(大谷 亮)

□「山岳総合索引」のおすすめ□

部数に限りがありますので、早目にお申し込みください。
 会員特別頒布価格一八、〇〇〇円
 (三回の分割払い可)です。
 申し込みは日本山岳会事務局へ。

山岳編集委員会

海外の山

ニルカントに消ゆ

江本嘉伸

「デントから雪崩の崩壊する大きな音を聞いて飛び出すと、六人の姿は消えていた」山麓のバドリナードまで下山した、唯一の生存隊員、松山昭(五〇)は、テレビの電話インタビューで、そう説明した。

九月三十日、インド・ガルワールヒマラヤのニルカント峰(六五九六メートル)で起きた「帯広ビスタリクラブ隊」の遭難。佐々木裕一隊長以下六人は、絶望とみられている。

ニルカント峰は、一九三七年に初挑戦した、英国の登山家、スマイスが「世界で最も美しい山」と形容したことで知られる。鋭くそそり立つ峻険な山容で一九六一年のインド隊の初登頂まで二十四年、六つの隊の挑戦を退けている。

初登頂の時もヒマラヤン・クラブの会員から「本当に登ったのか疑わしい」とのクレームが出て、インド登山財団では特別委員会を設けて調査した経緯もある。

その峻峰に、「日本人初登頂」を

かけて帯広在住者を中心とした七人の登山家が出かけたのが、八月末。第三キャンプまで設置し、九月末にアタック、という計画だった。

当初、この隊は北面ルートからの登山許可を申請していたが、国境問題を理由に許可が出たのは南面ルートだった。しかし、先発隊が現地入りしてみて、南面では資料がないことがわかり、今春インド国際隊が登った北東稜にルートを変更した。

事故当日は、高度順化できず調子の悪かった松山隊員が、第二キャンプ(五五八〇メートル)に残り、一行の登高を見守っていた。ここから第三キャンプを出さずに、一挙に頂上をねらったらしい。

雪崩か、セラック帯の大崩壊かは不明だが、一挙に六人もの命が消えてしまった、という点では、ナンダ・カートや、梅里雪山の大遭難を思い起こす。前途ある帯広畜産大学の二人の学生の死が惜しまれることは勿論だが、この二人を別にしても美しい山に消えた男たちの平均年齢は、四十二歳。それぞれ家族も仕事もある働き盛りだけに無念の思いが残る。が、今回はもう一つ、別な問題も生じた。

地方都市の山仲間が計画から実行

まで独力でやった登山だけに、遭難発生後、対策を講じるための母体となる組織がなかったのである。

海外で山岳遭難が生じた場合、その対応は簡単ではない。とりわけ、今回の帯広ビスタリクラブのように、登山のために臨時に仲間たちで作った組織の場合、出発してしまつたら、実質的には本部も何もすべてが現地に移動してしまうことが、通例である。

勿論、留守本部は置くのだが、それは連絡役程度のことが多く、今回のような非常事態を想定して設置されることは稀である。

ニルカント遭難では、佐々木隊長をよく知る日本ヒマラヤ協会の知人たちが現地情報の獲得、人の派遣まで引き受けた。地元帯広からは勤労者山岳連盟のメンバーがやはり現地入りした。今や、海外登山は、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、あるいは各県岳連といった組織が母体となつて実践されるだけでなく、親しい仲間同士が許可を取り、気軽に出かけていく時代だ。

しかし、一方で、遭難の危険はつきまとう。今回の事故の教訓として「留守本部」の意味を、せめて真剣に考えたい。

東西南北



ウエストンと市野瀬の村長

田畑真一

明治二十五年八月、ウエストンは赤石岳(三二二〇メートル)への登頂をめざし、市野瀬、つまり現在の長野県上伊那郡長谷村方面へやってきた。ウエストンは「この小さい村には宿屋は一軒もなかったが『村長』に頼むと、欲しいものを間に合わせるために、親切に骨おつてくれた。(田畑注・中略)村長の家の入り口の後の土間に入った時、私達は非常に驚いた。炭俵と百姓道具と日本の馬具と野菜の束が、雑然と入り重なって、床の上にあった。それに隣った室々には全く畳が敷いてなかった。そして養蚕につきものの汚れや臭気がひどかった。しかしこれらの室々を通り過ぎ、この室の後にある一番奥まった室に入って行くと、私が今まで入った中で、一番気持ちのいい室

の一つにいたのであった。畳は特別の品質のもので、汚点一つなく、歩いて柔らかだった。そして妙な好みで彫られた黒光りの木工細工が、四方の壁を取巻いていた(『日本アルプス―登山と探検』)と述べている。

ウエストンは市野瀬の村長に、いろんな親切を受けた。村長宅で休憩もしている。しかし、村長名などを明らかにしていない。私はこの村長は伊東伝治郎であり、その場所が現在の長谷村大字杉島四十四番地であると断定したい。当時は、杉島も市野瀬に含まれていた。村長制施行による市野瀬の初代村長であり、明治二十二年から二十六年まで在任した。

ただ、村長宅は明治三十年に焼失したが、当時をしのぶ資料は何ひとつ残っていない。跡地にはその後建てられた建物があり、それも空家となっている。ちなみに伝治郎からは、伝治郎(嘉政(元村長))―伝兵衛氏(元長谷村助役)―嘉文氏との系統をたどる。伝兵衛氏のお話によると、当時は養蚕や農業をやっていたとのことで、この点だけがウエストンの記事と符合する。

(別記) 先人のお名前については敬称を略させていただいた。なお、本稿をまとめるにあたり、伊東伝兵衛氏を始め伊東甲一郎氏(長谷村長)、宮下

彦二氏(長谷公民館長)、柿木憲二氏にご配慮をいただいた。記して謝意を表します。

緑萌える花の島々谷から 徳本峠を越えて

坂倉登喜子

今年の島々谷は残雪が多いためか、水量がいつもより増えて、二岐の河原での青空クッキングができないので、登り口でエーデルサラダを作って昼食とした。

いつもながら岩魚止小屋泊定員十名のメンバーは、萌え盛る緑の谷を遡った。清流の深い青さに映える新緑の樹林をわたる風は、ほのかに透明な光を通して、緑の匂いをかぐわせる。「緑の匂いってあったのかしら……」

と、私はつぶやきながら歩いた。あたりはニセアカシヤや紫のフジ、キリの花が盛りで、緑のニュアンスに色を添えて裾模様のように美しい。二岐から左へ分かれた山道は少し急な岩の登りとなるが、左斜面はミヤマカタバミの花がまず微笑みかけてくれた。この島々谷でいつも出会う花の中でも、最も気品のある花の女王は、白い清楚な数少ないヤマシヤクヤクで、あるときは岩の彼方の遠い所に、またあるときは山の斜面の樹林の中にやっ

と見つけて歓声をあげる花だ。今年は道端で、一本は開花した姿で、次に見つけた花は蕾のまま、私たちを待っていてくれたかのように、ひっそりと咲いていた。記念山行より一日早く歩く私たちだけの道で、大輪の花を近くのぞきながら、皆で接写レンズで撮影した。

私たちは若い人が一日で越えるこの峠道を、ゆっくりと二日かけて、花を見ながらのビスタリー歩きである。これは、あはれは、と花を見つけては足を止めるカタツムリのごとき谷歩きだ。

やがて小屋に近づく頃、いくつかの棧道を過ぎて湿地帯になり、苔のついた倒木に今年もまた数を増やしてカモメランが咲いていた。この薄紅色の可憐な花が、いつまでも同じ場所に咲き続けてくれることを心から願いつつ、小屋に向かった。岩魚止小屋の前まで行くと、奥原さんに知らせるかのようになり、犬が吠えて迎えてくれた。

夜はランプの下で山菜すくめの手料理。ウドやユキザサの味は新鮮でおいしかった。翌日は早朝出発。サンカヨウとニリンソウの群落する花の道でカメライム、最後の水場でハチミツレモン水で元気を出し、休み休み雪を踏んで急登。十一時半頃峠に着き、穂高をバックに生きて再び登れた幸せを喜びつつ記念撮影をした。小屋の小松さ

んに迎えられ、乾杯して昼食。峠で最高齢の宮原さん一家と出会い、お互いに元気で登れたことを喜び合った。

今年に残雪が多く、上高地側下山路は装備を完全にと、信濃支部の田中さんから連絡いただいたので、ロングスパツにストックを用意したが、もうかなり雪はとけて、それほど危険ではなかった。それでも足弱な人は、せつかく持ってきたからとストックを使って安全に雪の道を下った。

いつものように梓川畔に出る手前にニリンソウの大群落があった。ここで花の精になった気分で写真を撮りあい、右側斜面のシャクナゲの群れを見上げて、島々谷花の道を終わった。今年は寒さが続き、上高地の小梨はまだピンクの蕾だった。

上高地には四時半頃着いたので、新装成った山研の資料室を観覧し、西糸屋に全員集合して一泊。翌日は碑前祭に五十名で歌を捧げて解散した。

釈迦岳と越敷岳

渡辺智俱人

両峰とも九州の山であるが、国土地理院の表記に間違いがあり、指摘しておきたいと思ふ筆をとった。

まず釈迦岳。一等三角点名は釈迦ヶ

岳。二万五千分の一地形図は「豊後大野」で、地図上における三角点のマークは大分県日田郡前津江村内の電波塔の記号と共に一二三〇・八メートルと記載されたピークである。また平成三年八月発行の日本の山岳標高一覧・一〇〇三山(建設省国土地理院編集)の六九ページには標高一二三二メートル、経度一三〇度・五三分・二九秒、緯度三三度・一分・〇三秒、大分県と掲載されている。

私は数年ぶりに平成五年二月二十一日、小雨の中を釈迦岳から御前岳へ歩いたが、三角点が設置されたピークに疑問を感じ、改めて同年五月五日に調査を試みた。その結果、以下のことが明らかになった。地図上の三角点のマークのあるピークにはドーム型の電波塔とレーダー雨量観測所が並立し、現在はここまで車道が通じているが、三角点の標石はない。一等三角点の標石は、地図に記載された三角点のピークから西へ九〇メートルのピークに設置されているのを確認した。わずかな距離だが、ここは福岡・大分の県界線にあたり、その頂きには写真のごときプレートが設置されている。標高一二二・九・五メートルと経度、緯度が記載されているが、前記の山岳標高一覧の秒数とは若干の差異を認める。この小ピークは福岡県矢部村と大分



釈迦岳山頂のプレート

県前津江村との境界上の無名峰で、数年前に地元新聞紙上で福岡県の最高峰と指摘されたことがある。現在では地図に記載されていないこの無名峰に一等三角点標石、釈迦岳の山名標識、写真のプレートが設置されている。したがって福岡県では添田町の英彦山一〇〇メートルを抜き、こちら釈迦岳一二三メートルが最高峰となり、国土地理院の地図の山名と三角点マークは西へ九〇メートルの県界のピークへ移し記載すべきであろう。

今一つ、越敷岳は二万五千分の一地形図は豊後柏原で、祖母山の西側、

熊本県高森町津留と大分県竹田市の県境にある、三等三角点のある一〇四三・二メートルのピークである。三角点標石は、双耳峰をなす北東側の頂きに設置されているが、山頂には山名の標示もなく、山頂に至る遊歩道すらない敷山である。山麓周辺の住民に尋ねた結果、この山は昔から群という名の山で、越敷岳とはいいませんと。まことの越敷岳はこの群のピークから直線で八〇〇メートル東にある地図に山名も三角点もない一〇六五メートルの岩峰を指すという。このほうの山頂には古い石祠が三基と越敷岳のプレートがあり、古くから信仰の対象とされてきた山であろう。大分県竹田市尾村からと熊本県高森町神原からの遊歩道があり、ハイカーはひとしくこちらの越敷岳の岩峰へ登っている。故に地図に三角点のマークと越敷岳とある一〇四三・二メートルの山は、実は群と地元住民から呼ばれている山で、越敷岳のほうは群から八〇〇メートル東の三角点のな

い一〇六五メートル峰を指すという次第である。

以上、九州関係の山、二点につき述べたが、諸兄のご意見が拝聴できれば幸甚である。

今年もさっしりで会いましょう

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

合縁奇縁・姉妹山

去る六月十一日午後一時過ぎ、紅一点の李敬玉団員を含む慶南支部十三人と、ソウル支部四名の合計十七名のメンバーを仙台国際空港に出迎えた。

歓迎会場の仁別クワドーム・ザブーンに着いたのは日も暮れた七時半過ぎ。さっそく八時から歓迎会が開催された。岡田支部長から歓迎の言葉が述べられ、記念品の交換をばさんで新任の金英文慶南支部長から挨拶がなされた。

続く花束贈呈などでセレモニーが盛り上がったところで、裴三鎮元老会会長の音頭で乾杯。祝電披露がさらに歓迎会に花を添えて、約一時間半の宴会はあっという間に過ぎた。一行はその夜、森林学習館に宿泊した。経法大山岳部

支援隊のテントのほのかな明かりが、日韓友好第一夜に一抹の風情を添えた。翌十二日、太平山登山当日の朝は、鳥海山の勇姿を遠望できるほど素晴らしい上天気となった。梅雨入りという時期に晴天に恵まれたということ、最高最強の味方を得たにも等しい吉慶事である。鈴木幸雄会員は登山道を歩きながら、筆者に笑顔で話しかけたものだ。「やはり山の神様はいるなア」

御手洗(みたらし)の泉で喉をいやしたのち午前十一時前、日韓総勢四十二名は太平山山頂に名実共に姉妹山成就の足跡を印した。「韓国智異山・秋田太平山姉妹山締結記念登山」と書かれた記念標柱を、智異山天王峰の方向(西南西)に向けて建て、日韓のさらなる親善と山旅の安全を祈願した。参籠所で昼食をとったのち午後一時前、往路を下山。里宮に詣でて、一同御神酒を拝受したのち、マイクロボスで孫六温泉へ向かう。孫六温泉での懇親会では、自己紹介のあと余興の交換で座が大いに盛り上がったが、芸達者な秋田チームの方が優勢であった。

翌十三日は、濃霧と強風を突いて日韓総勢二十二名が男岳まで到達し、残雪と白妙の世界に岳人の変わらぬ友情を誓いあった。下山後、田沢湖レストハウス内「季亭」において送別昼食会が開かれ、今回の交流登山の成功を祝

次代に残そう美しい山と溪

しあった。

午後三時過ぎ、慶南支部十三人を盛岡駅に見送る。「トマンナツシダ(またあいましよう)」と一人一人堅い握手を交わすと、手を振りながら改札口を通り抜けていった。

調印は人間たちがこいねがい、人が集まって行った業であるが、これをめぐる二つの記念登山において、いずれも晴天に恵まれるという御加護を得た。これは、皆が努力して成し遂げたことが、岳人の詩と真実から出たものであり、決して間違いはなかったことを、大自然のほうから証明してくれたのだと感ぜずにはいられない。

国内では、北海道の羊蹄山(一八九三メートル)と尻別岳(一一〇七メートル)が「姉妹火山」の間柄で、アイヌ語では、「ノミの夫婦」と呼ばれているようなケースもあるが、智異山と太平山のように、外国の山同士が姉妹縁組を結んだのは、世界でも恐らく例のないことであろう。その奇しき良縁を、大自然が心から祝福してくれたのではないだろうか。

このたび、隣国の岳人たちの訪問を受けて、妹分の太平山もその喜びを全身全霊をもって表したものでしょうか。

そして、平和と友愛の象徴たらんと

する姉妹山のさりげない存在が、世界と人類に対し、何事かを語りかけてくれるであろうことを、心底願わずにはいられないのである。

結願の 鈴の音涼し 姉妹山
(土肥貞之)

岐阜支部

金剛堂山・高峰

金剛堂山・高峰
越中の名山。山頂にはなぜか富山藩主のあまり上手でない歌の碑が建っている。

参加者 高木碯、国枝、森本、小西、高木基、水野、木村、高木志、西川、村田

五月二十九日 大垣⇨富山県利賀村上
百瀬

五月三十日 上百瀬⇨栃谷登山口⇨金剛堂山(一六三七・九メートル)⇨

登山口⇨高峰林道車止⇨高峰(一〇七一・四メートル)車止⇨大垣

日本山岳会岐阜支部と京都支部の懇親山行としてこの山が計画されたが、京都支部の松浦勇次さんが紀州の山で行方不明になる事故が起きたため延期

され、今回一年ぶりに実現した。

民宿「瑞峰」がある富山県利賀村は一寒村にすぎなかったが、国際演劇祭「利賀フェスティバル」を毎年開催するユニークな村として、一躍全国的に有名になった。そのせいか、村内には信州辺りのリゾート地を思わせる立派な宿泊施設が散見された。

真夜中に屋根をたたく強い雨音で目を覚ました。天気予報のとおり雨になっただけで、これでは金剛堂山に登るのは無理だろうと思いつつ、また夢の中にもどった。そして再び目を覚ましたときには窓の外は明るく、降り具合はいかにも障子を開けてみると、なんと雨なんか全然降っていない。雨音と聞いたのは、実は裏を流れる百瀬川の瀬音だったのである。空を見上げるとどんよりと曇っているが、まだ涙をこらえているようだ。これならなんとか登れそうだと、布団をはねのけて身支度にかかった。

宿の前の道を五分ほど奥へ入ったところに、金剛堂山の栃谷登山口がある。「白木・水無見立自然公園」の看板があり、駐車スペースも十分にある。登山道は竜口谷と日尾谷の間の尾根を登っており、頂上まで約四・九キロ、所要時間約二時間半となっている。地元の人たちが山頂にある祠に参拝する古くからの道らしく、無理のない楽な

コースだ。

途中には広大なブナの原生林があり、その中を行くと苔の上を歩いているみたいにならなう。フワフワしたものが散り敷いていた。ブナの花が散ったものらしい。一歩一歩踏みしめる足元には、イワウチワ、イワカガミ、シヨウジョウバカマ、オウレン、ツバメオモト、イワナシなどの可憐な花々が咲いており、見上げるとタムシバのしみひとつない純白の花弁が輝いている。この山はタムシバが格別に多く、山肌全体が白く見えるほどだった。遠くからはホトトギスやツツドリや鳴き声が聞こえて春の気分がいっぱい。

「登山口から三キロ」の標識が立っている鞍部から展望がきくようになり、鹿子まだらの人形山や三つ辻山を望むことができた。春山の楽しさをじっくりと味わいながら、約三時間弱で登山頂上には石造りの立派な祠があって、七〇一年(大宝元年)に役小角が開いたとされ、「五箇五谷野積四谷鎮護の靈域」として山岳信仰の中心だったと石碑に刻まれていた。

ここから約十分ほど離れたところに一六五〇メートルの最高点があるので、空身を往復することにした。馬の背のような広々とした山頂の付近にはまだ雪が残っており、雪解けの後にはザゼンソウが咲き、近くの池には綿のボー

ルのような何かの卵が沈んでいた。雪国の、しかもこんな高いところで厳しい冬を耐えてきた小さな命にも、ようやく待望の春がやってきたのである。

(村田正春)

越後支部

第四十回記念

弥彦山松明登山祭

本年は、松明登山祭四十周年にあたり、七月二十五日に盛大に行われた。また、平成四年度越後支部総会は同日、弥彦山国見平の高頭仁兵衛碑前で、佐藤支部長、上村副支部長ほか二十余名が参加して開催された。

松明登山祭については、これまでに功労のあった山岳関係者と個人に対して表彰があり、また、新潟大学講師・筑木力先生(会員)の記念講演「大平晟と高頭仁兵衛との師弟交流」があった。その後、山頂から赤々と炎を上げる松明をかけた、下山。さらに祭りできわう市街を大行進、駅前で解散した。なお、参加者全員には四十年の歩みを記述した「弥彦山松明登山祭の栞」が配布された。

松明登山祭の起りは、昭和二十八年ごろ、地元山岳会の花井馨氏が弥彦神社の高橋章允宮司から相談を受け、かつて県下で最もぎやかだった弥彦

灯籠祭の活性化のために考えられ、日清戦争のころまで行われていた農民の「弥彦山雨乞行事」を再現したものである。もとよりこの行事には、地元山岳会だけではなく、越後支部、県山岳協会の協力があったからこそ長年続いてきたのである。これまでに、日本山岳会本部からは、中央講師として、松

方三郎、加藤泰安、沼倉寛二郎、深田久弥、山崎安治、成瀬岩雄、吉沢一郎、三田幸夫、折井健一、浜野正男、板倉勝正、金坂一郎、渡辺公平、坂倉登喜子の先生方が来られている。そのほか、田村剛、榎有恒、日高信六郎、冠松次郎、村井米子、田部重治、中村謙、西堀栄三郎の諸氏も来山されている。

創始者花井氏は、四十年にわたり支えてくれた人々に感謝すると共に、この松明の灯を二十一世紀につないでほしいと念願されている。

万葉の弥彦歌

伊夜彦おのれ神さび青雲の
棚引く日すら小雨そほ降る

(山田一男)

資料寄付のお願い

登山の用具、記録など、整理するとき考えてみてください。他に寄付する前に山岳会へ、捨てる前にも再考を。

資料委員会

REPORT

報 告

環境保護に意欲的な

台湾を訪問して

「四方国語の北アルプス自然保護・安全登山案内書」について前号でお知らせしたが、この作成にあたって、中国語への翻訳などで、中華民國山岳協会の蔡会長を始め、陳守珪秘書長、季剛龍理事にはずいぶんお世話になった。パンフレットが完成した機会に、協力へのお礼と台湾での活用をお願い、さらに両会の親交を深める目的で、去る七月十八日(二十一日に藤平会長とともに訪台した。当地では、黄鑫羽副会長、陳守珪秘書長、梁明本副秘書長、林樹封常務理事、卓平山常務理事、吳彥清常務監事、林源美理事、高全輝理事、季剛龍理事による歓迎レセプションを受けた。

その席上、四方国語登山案内書の利用目的、内容を説明し、活用についてお願いした。また席をかえて「民生報」の體育戶外中心休閒組組長黃德雄氏のインタビューを受けた。

翌日、台湾の自然の一端に触れたいと、当自然保護委員の伊藤徹会員が出席直前に見ることをすすめてくれた紅

REPORT

檜の巨木のある拉拉山(達観山)への案内をお願いし、台北から梁明本氏の運転するジープで往復十時間の探索行を行った。

拉拉山は国家公園(国立公園)ではないが、自然保護区になっていて、チェックポストで「環境美化及清潔維持費」五十元(二百五十円)を払って入山する。その域内は日本よりはるかに美しく保たれていた。樹齢二千年前後の紅檜の巨木群の中を散策できる道があり、これを歩きながら、その樹々が過ぎたであろう永い歴史に思いを馳せた。広い山域のほんの一部に道がつけられている。この広い森林の中に、どれくらいまだ知られていない巨木が隠されているのか。このようなことを思いつつ、紅檜の山域が永く残されることを心から願った。

台北では、国立故宮博物院、国立歴史博物館、科学博物館に行った。科学博物館は子供に対する科学教育を目的としていると見受けられたが、その展示の約八割が、公害防止に絡むことであるのに驚いた。水の循環、廃棄物の循環などを動画で見せていた。持ち出し禁止の資料棚に、我々にも参考にな

る資料があり、これの入手法を係の人に聞いたところ「これを持って行ってください」ともらうことができた。

台湾では、子供の世代からこのような教育をし、マナーについても教えている。我々の活動が、これらに比べてまだいかにささやかなものであるかを感ぜさせられた。(大森弘一郎)

三水会・八月現地集会

大山北尾根

四月の現地集会の時、阿部氏より八月に静かで涼しい大山北尾根をやりましょうとのことで、大賛成と言っていたら、係になってしまった。

八月十四日(土)、小田急線秦野駅に九時集合、予約したタクシーに分乗して、ヤビツ峠経由で札掛の少し手前、地獄沢橋で下車する。

サブリーダーの大森氏の指導で、準備体操。地元出身の山ノ神研究家の佐藤(芝)氏のコースリーダーで山林巡回路の尾根に取りつく。03で小休止。低気圧が日本海にあって、雲が厚く風が強いので、涼しくて気持ちがいい。ミズヒの頭は今日一番の急登、西沢の頭や小ピークを上下して頂上直下の台地に出る。

昼食後、佐藤氏より大山林主、諸戸家の話や札掛のレクチャーを受けた後出発。竹藪を十分ほどかき分けると、

阿夫利神社の裏手にひょこっと出た。神社の前では、ヤビツ峠と表参道を登った三人と合流した。

山頂はガスの中で展望がきかない。全員集合の記念撮影の後、見晴台コーラスを下る。途中バラバラと落ちてくるが、下るにしたがって止んでしまった。ケーブル下の追分の豆腐料理屋で反省会の後、散会した。

〔参加者〕 阿部一孝・好子、岩堀瑞子、太田新生、大森周作、岡野修、片岡博、金沢喜八、金谷修文、川上光久、木村俊博、酒匂輝昌、佐藤芝明、妹尾幸雄、原田衛、樋口公臣、平澤哲臣、福島幸太郎、吉武玲子の二十三名。(平澤哲臣)



山頂の記念撮影は笑顔もかすむガスの中……

日本山岳会蔵山岳地図目録 6 アルプス(1)

A官製 B個人, 団体 a シリーズ b 単作 c 付録 d 概念図 e その他

分類番号	発 行 者	発行年	地 図 名	縮 尺
A 4-1 a	Institute Geographique National	1959	CHAMONIX	1 : 100,000
A 4-1 a	do.	1962	ST. GERVAIS LES BAINS	do.
A 4-1 a	do.	1960	ST. CHRISTPHE EN OISANS	do.
A 4-1 a	do.	1960	CHAMONIX	1 : 50,000
A 4-1 a	do.	1959	MONT BLANC	do.
A 4-1 a	do.	1959	CHAMONIX No. 5-6	1 : 20,000
A 4-1 a	do.	1958	MONT BLANC No. 1-2	do.
A 4-1 a	do.	1954	Le Fayet cluses-7 sud	1 : 10,000
A 4-1 a	do.	1954	St. Gervais-Lesbains GS-3 nord	do.
A 4-1 a	do.	1953	Seyvoz cluses-8 sud	do.
A 4-1 a	do.		Les Houches GS-4 nord	do.
A 4-1 a	do.	1953	Le Buet chamonix-1 sud	do.
A 4-1 a	do.	1951	La Flegere chamonix-5 nord	do.
A 4-1 a	do.	1950	Chamonix-Mont Blanc chamonix-5 sud	do.
A 4-1 a	do.	1952	Aigulle du Midi mont blanc-1 nord	do.
A 4-1 a	do.	1953	Aigulle Verte chamonix-6 sud	do.
A 4-2 b	Eidg. Landestopographie	1965	LANDESKARTE DER SCHWEIZ	1 : 500,000
A 4-2 a	do.	1957	BRUNINGPASS Blatt 37	1 : 100,000
A 4-2 a	do.	1959	OBERWALLIS Blatt 42	do.
A 4-2 a	do.	1965	MONTE ROSA Blatt 47	do.
B 4-2 b	Kummerly & Fray		GOTTHARD	1 : 75,000
B 4-1 b	Kummerly & Fray	1929	LA CHAINE DU MONT BLANC	1 : 50,000
A 4-1 a	Eidg. Landestopographie	1929	COL DU GRAND St. BERNARD Siegfried Map	do.
A 4-2 a	do.	1926	INTERLAKEN-GSTEIG	do.
A 4-2 a	do.	1928	RAWIL PASS	do.
A 4-2 a	do.	1925	THEODUL PASS	do.
A 4-2 a	do.	1927	THEODUL PASS	do.
A 4-2 a	do.	1922	GADMEN-BIETSCHHORN	do.
A 4-2 a	do.	1927	VISPERTHAL	do.
A 4-2 a	do.	1927	GRIMSEL	do.
A 4-2 a	do.	1928	SIMPLON PASS	do.
A 4-2 a	do.	1927	LUKMANIER	do.
A 4-2 a	do.	1928	MONTE CENERI	do.
A 4-2 a	do.	1926	VIAMALA	do.
A 4-2 a	do.	1927	SPLUGEN PASS	do.
A 4-2 a	do.	1928	PRATIGEN	do.
A 4-2 a	do.	1928	BERNINA PASS	do.
A 4-2 a	do.	1928	OFEN PASS	do.
A 4-1 a	Eidg. Landestopographie	1968	MONT BLANC-GRAND CAMBIN	1 : 50,000
A 4-2 a	do.	1965	ZERMATT UND UMGEBUNG	do.
A 4-2 a	do.	1966	BERNER OBERLAND	do.
A 4-2 a	do.	1959	VISP	do.
A 4-2 a	do.	1961	GOTTHARD	do.
A 4-2 a	do.	1974	LUZERN UND UMGEBUNG	1 : 25,000
A 4-2 a	do.	1958	BECKENRIED	do.
A 4-2 a	do.	1964	PIZ BERNINA	do.
A 4-2 b	do.	1964	ALETSCHE GLETSCHER Blatt 1~4 a, 4 b	1 : 10,000

図書紹介



齋藤一男著

『山をよむ』

本書は、日本山岳協会齋藤会長著により、「情報源……をよむ」シリーズの一冊として刊行されたもので、同じ題名の『山を読む』（小崎尚著、一九九一年七月、岩波書店刊）とは同音異種の本である。（編者注『山』五六五号十一ページに関連記事あり）

前著が、自然景観の読み方シリーズ③として、山を眺め、山へ登る喜びを静かに深く味わうことを目的としているのに対し、本書は、情報化時代に対応し、忙しい読者に、上質な情報を選別して提供するべく編集されたものである。

本書の内容は、山岳論、山岳研究、登山小史、登山技術、アルプス・ヒマラヤ紀行、随筆、案内、遺稿、雑誌の九章に分けて、著者が選定した百冊の山書を収録。巻末に主要文献目録がつけ加えられている。本文には、百冊の本が題名にしたがって解説されている

が、ストーリーとしても楽しく読めるよう上手に編集されている。

しかも、今回の企画が名著の解題や書誌にふれた企画ではないこともあって、百冊の選定に当たっては、これまで名著として評価されていたものを減らしてまでも、あまり日の当たらないかったものに目を向けている。さらに、重版されたり、復刻されたりして、現在入手しやすいものを重視して採録していることも親切である。

この中には、著者が若き日に情熱を傾けた近代日本アルピニズムの歴史や岩壁登攀の歴史をまとめた『日本のアルピニズム』（一九六五年朋文堂刊）や『山と人』（一九八〇年東京新聞社刊）も当然のこととして含まれている。登山技術の章には、文部省登山研修所の『高みへのステップ』や『楽しい登山』、著者が都岳連会長時代にまとめた『山岳救助技術』や『海外登山の手引』、日山協が企画監修したビデオ『現代登山』までもとりあげて実用に供している。また、「団体登山」や「スポーツクライミング・コンペティション」の解説もつけ加えられているなど、著者ならではのユニークな配慮がなされている。

本書の冒頭に著者は「チョモランマのBCで構想を練り、帰国後、一気に呵成に書き上げた」と書いているが、こ

自然保護随想

夢の
上高地鉄道

関塚貞亨

今年の夏、上高地はマイカー規制がされているのに、車の渋滞が発生して規制の効果が上がらない日が、何日もあったという。会員K氏は「新島々行き定期バスが、渋滞に巻き込まれ、発車時刻を一時も過ぎて、ようやく到着した」と語っている。普通なら一時間半以内のところを、倍以上かかったことになる。

この渋滞の原因は、観光バスを規制しないことにある。松本電鉄の定期バスや地元タクシイは、曲がりくねった道も、擦れ違い可能な場所も解っているから、渋滞を起こさない。国道一五八号に適さない大型バスで曲がりきれずに、キックバックも後続車に阻まれ立往生したり、交換不可能なところを無理に突っ込んで、大型バス同士が睨みあっていたりする場合もあるが、ちょっと一、二時間、上高地で客を散歩させて、後は乗鞍、高山あるいは安曇野方面を観光する大型バスが、同じようなスケジュールで、同じ時間帯に狭い上高地に十数台も押しかけ、狭い

駐車場は満杯になる。後続の観光バスが駐車場の空くのを待って、数珠つなぎに道をふさぐ、というケースが一番多い。

マイカー規制のときは、旅館組合の一部に反対があったと聞か、今夏の車渋滞を見れば、観光バスも沢渡止まり、あとは、シャトルバスで、という規制に賛成する向きも多かるう。

気になることがある。一つは排気ガスの問題だ。八月十二日の上高地で、車道の両側の白樺の何本かが、黄ばんでいたのを見た。冷夏で秋が早まったのか、やはり排気ガスのせいだ。

排気ガスのことを考えると、鉄道マニアの宮脇俊三氏の著書『夢の山岳鉄道』で提唱している「上高地鉄道」計画に乗ってみたいくなる。沢渡から上高地まで梓川に沿って単線の登山鉄道を敷いて、車を締め出そうという計画だ。

鉄道に賛成する条件として「運行期間は、現在のバスと同じ四月末から十一月初旬まで」としたい。なぜならば、一九九八年までに完成を予定している平湯から中湯間の新安房トンネルが開通した場合、高山方面から冬場でも中の湯までは来られる。釜トンネルをラックレールの鉄道が走れば、冬の上高地も観光客で溢れよう。やはり上高地登山鉄道は夢にしておくべきか。

これは山書に關しての見識をもち、かつて『ケルン』誌上に「山岳名著考」を連載していた著者にして、初めてなした得たものといつても過言ではない。

一九九三年五月 アテネ書房刊 一八〇ページ 定価一、五〇〇円 (松田雄一)

『初見一雄追悼集』

多くの人々に「初つあん」として親しまれてた当会名誉会員初見一雄氏の想い出を抱いて、かつて上高地で「初つあん」の洗礼を受けた人々をはじめ山仲間が「初見一雄さんを偲ぶ会」を開いた。同氏の持つ不思議な魅力について、大勢の方々が多々話されたが「怪人初つあん」を語り尽くすには十分でなく、そこで改めて作られたのがこの追悼集である。

第一部「遺稿」は故人が五十五年にわたって会報等に発表されたものの中から転載した十四編で、現役学生の頃から登山・山岳部・山岳会と真剣に取り組んでいた様子が記されている。

第二部「追悼・寄稿」には母校日大・北大OBをはじめ日本山岳会の仲間たちが筆を執り、類い希な人物像「初つあん」の思い出が二十六編の追悼文としてまとめられている。そして最後に実姉マリ子様と初見さんの二女薫様からの寄稿二点が収められている。

山男たちから見た求心力に満ちた外なる「初つあん」と共に、内なる家族から冷ややかに見られていた初見一雄氏の両極面が浮き彫りにされ、追悼文の中に「どうか初つあん、天国から落ちないでくれ」と記された一文にも何か納得がいくような気がした。

略歴、登山歴、執筆歴の付記あり。

日本大学理工学部平山研究室内「初見一雄追悼集」編集実行委員会発行 一九九三年四月刊 A六版二〇五ページ 非売品なるも希望者は本会事務局に申し込めば頒価三、〇〇〇円(送料込)にて入手できる。(南井英弘)

鈴木弘道著

『山の高さ』

山の高さについて、これほど正面から取り上げ、一冊の本になったものはこれまでなかったのではなからうか。素人とは恐ろしいもので、国土地理院が『日本の山岳標高一覧』を出すまでは、山の高さは決まりきったものと思ひ込んでいた。それが三角点をもって山の高さとしてを知って驚いたものだが、この本を読めば、山の高さを決めるのがなかなか大変なものだということが納得される。

山好きにとって、山の高さはとかく気になる。山座同定に關心のあるものにとってはなおさらである。

とかく議論に花が咲くものだが、測定に多くの方法があることを知るだけでも、話題が増える。そのすべてが一冊に収められているというのは、何とも心強い。座右において常に読み返してみたい本であることは間違いない。

一九九三年六月一日 日本測量協会 (〒112東京都文京区小石川一―三―四) 発行 二七八ページ 二、三〇〇円 (山口裕一)

日本植物分類学会編著

『レッドデータブック・日本の絶滅危惧植物』

昨年六月リオデジャネイロで開かれた地球サミットでは、いわゆる「温暖化防止条約」とならんで「植物多様性条約」が調印され、生物種が保有する遺伝子資源の重要性が広く認識された。植物多様性とは、簡単にいえば種の豊富さ、多さのことである。この多様性を高めているのは多くの場合、個体数の少ない種である。そして一般的に言えば希な種ほど絶滅しやすい。

今度刊行された「レッドデータブック・日本の絶滅危惧植物」は、この絶滅に瀕した種のハンドブックである。この本の元は一九八九年に勸日本自然保護協会と勸世界自然保護基金日本委員会が設置した「我が国における保護上重要な植物種および群落に関する研

究委員会」の種分科会がまとめた「我が国における保護上重要な植物種の現状」(一九八九年発行)、いわゆるレッドデータブックであり、現在も広く利用されている。レッドデータブックとは、IUCN(国際自然保護連合)とWWF(世界自然保護基金)が行っている「危機に瀕した植物・植物保全計画」にそって世界各国が進めている「絶滅の危機に瀕した植物種リスト」のことで、世界各国で立派な本が次々出版されている。

本書は種や生育地のカラー写真をふんだんに取り入れ、美しく見やすい本である。最近の種の絶滅は人為的な生育地の破壊によるところが大きく、かつてはいくらでもあったフジバカマ、サギソウなど身近な植物が、不注意な開発によってどんどん消えているのが特徴である。また、他方で山草愛好家やそれを商売にしている業者による希少種の採取は、プロだけあって徹底しているために、絶滅に結び付くことが多いという実態も明らかになった。現在は、前記研究委員会の群落分科会は、世界でも初めての群落版のレッドデータブック作りに取り組んでおり、生育地と群落の現状がより明確にされることが期待される。

一九九三年 農村文化社刊 三、五〇〇円 (大沢雅彦)

書籍・雑誌 受入報告 1993年7~8月

著者	書名/雑誌名	出版元	出版年	寄贈/購入別
四手井綱英著	森に学ぶ	海鳴社		著者寄贈
遠藤泰彦編	ブナ林の自然誌	千葉県立中央博物館		発行者寄贈
永田秀樹著	氷原の彼方へ	東京新聞出版局		出版社寄贈
Watts, Alan	Climber's Guide to Smith Rock	Chockstone Press		購入
Winser, Shane (ed.)	Expedition Planners Handbook & Directory 1993-94	Expedition Advisory		購入
Burnier, Francois	Thailande Escalades	Vamos		購入
Randall, Glenn	Mount Mckinley	Chockstone Press		購入
Winser, Shane (ed.)	Expedition Yearbook 1991	Expedition Advisory		購入
Juel-Jensen, Bent (ed.)	Expedition Medicine	Expedition Advisory		購入
Julyan, Robert Hixson	Mountain Names	The Mountaineers		購入
Carson, Rachel	Silent Spring	Houghton Mifflin Co.		購入
Ziff, Larzer (ed.)	Ralph Waldo Emerson	Penguin Books USA		購入
Giono, Jean	The Man Who Planted Trees	Chelsea Green		購入
Henley, Don (ed.)	Heaven Is Under Our Feet	A Berkley Book		購入
Nash, Roderick Frazier	The Rights of Nature	The Univ. of Wisconsin		購入
Bunnell, Lafayette Houghton	Discovery of the Yosemite	Yosemite Association		購入
Engberg, Robert (ed.)	John Muir Summering in the Sierra	The Univ. of Wisconsin		購入
Ponting, Clive	A Green History of the World	Penguin Books USA		購入
Daly, Herman E.	For the Common Good	Beacon Press		購入
Matthiessen, Peter	The Snow Leopard	Penguin Books USA		購入
Abbey, Edward (ed.)	The Best of Edward Abbey	Sierra Club Books		購入
Muir, John	A Thousand-Mile Walk to the Gulf	Sierra Club Books		購入
Muir, John	The Yosemite	Sierra Club Books		購入
Muir, John	Our National Parks	Sierra Club Books		購入
Muir, John	The Mountains of California	Sierra Club Books		購入
Muir, John	Travels in Alaska	Sierra Club Books		購入
Muir, John	The Cruise of the Corwin	Sierra Club Books		購入
Halper, Jon (ed.)	Gary Snyder	Sierra Club Books		購入
Cohen, Michael P.	The History of the Sierra Club 1892-1970	Sierra Club Books		購入
Chouinard, Yvon	Climbing Ice	Sierra Club Books		購入
Muir, John	My First Summer in the Sierra	Penguin Books Ltd.		購入
Matthiessen, Peter	Indian Country	Penguin Books USA		購入
Marsh, George Perkins	Man and Nature	Belknap/Harvard Univ.		購入
Perlin, John	A Forest Journey	Harvard Univ. Press		購入
Runte, Alfred	Yosemite	Univ. of Nebraska Pr.		購入
Huth, Hans (ed.)	Nature and the American (New Ed.)	Univ. of Nebraska Pr.		購入
Robertson, Janet	The Magnificent Mountain Women	Univ. of Nebraska Pr.		購入
McPhee, John	Encounters with the Archdruid	The Noonday Press		購入
McPhee, John	Rising from the Plains	The Noonday Press		購入
McPhee, John	In Suspect Terrain	The Noonday Press		購入
Fox, Stephen	The American Conservation Movement	The Univ. of Wisconsin		購入
Meine, Curt	Aldo Leopold	The Univ. of Wisconsin		購入
Wolfe, Linnie Marsh	The Life of John Muir	The Univ. of Wisconsin		購入
Callicott, J. Baird	Companion to a Sand Country Almanac	The Univ. of Wisconsin		購入
Rowell, Galen A.	The Vertical World of Yosemite	Wilderness Press		購入
National Wildlife Federation	Conservation Directory 1992	National Wildlife Federation		購入
Trzyna, Thaddeus C. (ed.)	World Directory of Environmental Organizations (4th Ed.)	CIPA		購入
Smith, April A.	Campus Ecology	Living Planet Press		購入

書籍・雑誌 受入報告 1993年7~8月

著者	書名/雑誌名	出版元	出版年	寄贈/購入別
Nash, Roderick	Wilderness and the American Mind	Yale Univ. Press		購入
Ernst, Joseph W. (ed.)	Worthwhile Places	Fordham Univ. Press		購入
Emerson, Ralph Waldo	Nature Walking	Beacon Press		購入
Franck, Irene	The Green Encyclopedia	Prentice Hall		購入
Thoreau, Henry David	Walden	Running Press		購入
Shabecoff, Philip	A Fierce Green Fire	Hill and Wang		購入
Russell, Carl Parcher	One Hundred Years in Yosemite	Yosemite Association		購入
Almanac, Sand County	Round River	Oxford Univ. Press		購入
Snow, Donald	Inside the Environmental Movement	Island Press		購入
Muir, John	Mountaineering Essays	Pergrine Smith Books		購入
Abbey, Edward	Desert Solitaire	Simon & Schuster		購入
McPhee, John	Table of contents	Farrar Straus Giroux		購入
Sax, Joseph L.	Mountains without Handrails	The Univ. of Michigan		購入
Riley, Laura	Guide to the National Wildlife Refuges	Collier Books		購入
Engel, J. Ronald	Ethics of Environmet & Development	The Univ. of Arizona		購入
山人編集部編	四季の山	東京新聞出版局		出版社寄贈
白旗史朗著	Great Karakoram	朝日新聞社		出版社寄贈
手塚宗求著	高原の音楽譜	恒文社		出版社寄贈
Kauffmann, John M.	Alaska's Brooks Range	The Mountaineers	1992	購入
Cobb, Sue	The Edge of Everest	Stackpole Books	1989	購入
Roberts, David	The Early Climbs	The Mountaineers	1991	購入
旧制富山高校山岳スキー部編	上れ雪溪	旧制富山高等学校山岳スキー部剣稜会	1993	発行者寄贈
エリック・シプトン著	エヴェレスト	日本山岳会・越後支部	1993	発行者寄贈
船尾美津子著	続・立山のふもとから	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
亀井敬著	霧藻 6	私家版	1983	著者寄贈
広島県山岳連盟編	広島県スポーツ登山半世紀の歩み	広島県山岳連盟	1992	個人寄贈
蓮實淳夫著	山巔に光求めて	牧羊社	1993	著者寄贈
山口裕一著	地図を使った風景スケッチ入門	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
工藤父母道編・監修	原生林紀行	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
小林路子画	きのこ画集	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
小野訓ほか編	フライフィッシング・マニュアル	山と溪谷社	1993	出版社寄贈

コフラックプラスチック製登山靴ご愛用のお客様へ

お詫びとお願い

日頃は、アシックス製品をご愛用いただきましてありがとうございます。さて、弊社では平成3年6月1日よりコフラックプラスチック製登山靴の販売をいたしておりますが、平成元年に前代理店でありますコサ・リーベルマン株式会社により輸入されました蛍光ピンクのクリマにつきまして素材に不備があり、場合によっては使用中に破損が生じるおそれがあることが判明いたしました。

該当製品につきましては、販売店

の皆様にもご協力いただきながら、全力を傾注して回収・交換中です。

つきましては該当機種をご愛用のお客様のご返品もしくはお取り替えをお引き受けさせていただきますので、右記の窓口、または、お買い上げのお店へお申し出下さいますよう、謹んでお願い申し上げます。

お客様には、大変、ご迷惑、お手数をおかけして、誠に申し訳なく、深くお詫び申し上げます。

今後はかかることの無きよう、万

全の体制をしていく所存でございます。なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

平成5年9月15日

株式会社アシックス
ライフスポーツ事業部

該当機種

コフラックプラスチック製
登山靴クリマ K 010

(蛍光ピンクカラー)

なお、クリマのなまえがついていても他のカラーは該当機種ではありません。

お申し出窓口

フリーダイヤル(無料)
0120-078-093

ルーム日誌

(8月)

2日 アルパイン・スケッチクラブ
3日 自然保護委員会
4日 青年部
7日 三水会
19日 自然保護委員会
20日 海外委員会(ジャック・エデ氏を囲む会)

23日 アルパイン・スキークラブ
26日 フィルム・ビデオ委員会
30日 青年部
31日 集委会委員 8月来室者262名

●**会員異動** ▼物故 金尾實(八七七〇) 5・8・7 工楽英司(三九八三) 5・8・14 長沢佳熊(二二六九) 5・8・27 ▼姓名変更 谷村久美代(八九九〇) ↓大谷久美代

山研・ナムチャ合同募金応募状況

(九月九日現在)

(五口) 亀井秀子、(四口) 金子丞二(六)、(二口) 寺田紀由、沢井貞夫、森丘實(三)、阿部慎二(四)、似鳥一彦、鈴木鎮夫(四)、久我良房(四)(一口) 桐生恒治(五)、高田昭則(累計 二、六五九名、八、六八四・一口 四千三百五十三万五千九百六十一円)



◆講演会「火山を読む」

集委会委員

自然景観の読み方、シリーズの第三弾として金沢大学教授守屋以智雄先生を講師としてお迎えし「火山を読む」をテーマに講演をしていただきます。日時 十一月十一日(木) 午後六時四十五分(受付六時半より) 場所 アルカディア市ヶ谷(私学会館) 4F 鳳凰の間 JR市ヶ谷駅より徒歩二分

講師 金沢大学文学部教授 守屋以智雄先生

資料 守屋先生の著書「火山を読む」(岩波書店刊)をテキストとして使用します。(当日頒布)

会費 一〇〇〇円(テキスト代一〇〇〇円は別です)

◆講演と映画の会

資料委員会

会員番号八一五番の中川喜久雄会員は戦前、志鷹光次郎や宇治長次郎と剣岳へ、上條孫人と穂高や乗鞍スキーに出かけ、ハミリのムービーを撮影してきました。これらの映画を観賞し、当時の登山についてうかがいます。

日時 十一月十三日(土)
場所 日本山岳会集会所
講師 中川喜久雄会員
演題 戦前の日本アルプス
司会 織内信彦名誉会員
会費 五〇〇円

◆マラソン大会

学生部

毎年恒例の学生部主催による皇居一周マラソン大会を行います。今年には三十周年にあたる記念大会、青年部からもOBチームが参加の予定です。団体戦は一チーム四名(皇居四周)、個人戦は皇居三周です。加盟山岳部に限らず、ふるってご参加ください。日時 十一月十四日(日) 九時三十分 場所 皇居、桜田門集合 連絡 成蹊大学 佐藤まで ☎〇四二四―二三―一三四一 (山本宗彦)

◆平成五年度年次晩餐会

総務委員会

今年も年次晩餐会を次の要領で開催します。詳しくは次号でお知らせしますが、当日は「アルパインスケッチ展」を企画しています。日時 十二月四日(土) 午後六時開宴 会場 新高輪プリンスホテル

◆「日本の地形・レッドデータブック」

への資料提供のお願い
自然保護専門委員会

東京学芸大学地理・小泉研究室では日本の貴重な地形を保存するために、資料を収集しています。森林の伐採のみの場合は、ここでは対象とせませんが、大規模な自然改変が行われ、貴重な地形が破壊されてしまったり、破壊の恐れのあるところをご存知の方は、ぜひ情報を左記へお寄せください。例えば、乗鞍岳亀ヶ池の「亀甲土」、東京エ田川の「自然蛇行河川」などです。〒184小金井市貫井北町四―一―一 東京学芸大学地理・小泉研究室 ☎〇四二三―二五―二一一(内線) 二四二九

◆「山の自然学現地講座」通年参加者募集

自然保護専門委員会
九月号でご案内した当講座は、今後月一回・一年間続けます。山の自然保護のリーダーを志す人は、ご参加ください。申込は郵送で、山岳会自然保護専門委員会まで、説明書を送ります。

日本山岳会会報 山 581号
1993年(平成5年)10月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102 東京都千代田区四番町
5-4 サンビュウハイツ
四番町
TEL 東京(03) 3261-4433
振替口座 東京 3-4829
発行者 藤平正夫
編集人 伊藤 敏
印刷 株式会社 技報堂